

を教えてもらおうと訪ね歩いたが、「耳が聞こえないから無理」と断られ続けた。やっとプロサーファーの小室正則さんとの出会い、20年勤めた会社を辞めて弟子入り。5年前に店を持った。

□○○□

日焼けした満面の笑み、カラフルなアロハシヤツ。そしてちょっぴり突き出たおなか。3年前の夏、サーフショップを営む太田辰郎さんを静岡県湖西市に訪ねたとき、その風貌と人懐っこいキヤラクターに思わず「ハワイの人？」と勘違いしそうになった。

太田さんは30年以上の経験を持つサーファーで、サーフボードを作る職人でもある。店を持つことは太田さんの高校時代からの夢。ボード作り



太田辰郎さん④取材する筆者

を借りてきてくれた。男の子と宇宙人が出会い、身ぶりなどでコミュニケーションをとり、次第に心を通わせる。物語に感動しただけでなく、家族と同じ映画を楽しめたことがうれしかった。

それから父は毎週のように字幕付き洋画のビデオを借りてくるようになった。映画から元氣や感動、

集などの映画作りを基礎から勉強した。帰国後、ビデオカメラを購入し、時間を見つけて撮影を始めた。ろう・難聴者を題材にしようと思ったのは、取り巻く現状を多くの人たちに気づいてほしいと思ったからだ。例えばテレビを見ても字幕がなかったり、駅のアナウンスも聞こえない

東日本大震災が発生。急きよ現地入りし、被災したろう・難聴者取材した。津波で家を失った高齢のろう夫婦の話に胸が痛んだ。

とで私も変わった。それまでは手話を知らない人と自分から距離をつくり、自分らしさを出せない窮屈さを感じていた。それが誰とでもコミュニケーションをとり、縁を大切にしたいと思うようになった。

字幕付きビデオで育つ太田さんはろう者の中でも珍しい存在だ。ろう者が就く仕事といえば、他の人とのコミュニケーションをあまり必要としないところが多い。ところが太田さんは「いらっしやいませ 私

耳の聞こえる聴者であろうと、ろう者であろうと心を開いて接する。次に会ったとき、「映画に撮らせてください」とお願いしていた。

私は映像作家として12年前から、ろう・難聴者

を題材にドキュメンタリー映画を撮り続けている。私自身もろう者だ。ろう・難聴者の夢や思いを知ってもらいたいと活動を続けてきた。

小学生のころ、父が映画「E.T.」のビデオにつけ、撮影、照明、編

愛知県立豊橋養育学校の生徒たちを撮った短編「めっちゃはじけてる！豊ろっ子」。ろう学校という「大変そう」「かわいそう」と偏った印象を持たれがちだが、実際は友達とケンカをすれば恋愛もする。聞こえる子たちと違うのはコミュニケーションの方法だけだ。

「珈琲とエンピツ」は私にとって初の長編。昨年冬の豊橋のシネコンに続き、3月10日から東京・新宿の映画館ケイズシネマでも上映する。今後海外の映画祭にも出品する予定だ。これからも聞こえる人と聞こえない人の壁をなくすきっかけを。いまむら・あやこ(映像作家)

ろう者の心ろう者が撮る

◇ドキュメンタリー映画通じ現状を多くの人に◇

今村 彩子